

『歎異抄』のおはなし⑬第十三条(2) くすりあればとて毒をこのむべからず

◎前回のおはなし

前は、「善悪は宿業から生じる」として、私たちの善悪の行いは、「宿業」すなわち過去世の行いの結果によるものであり、悪いことをするつもりがなくても悪行を働いてしまうこともあれば、「人を千人殺せ」と言われても、業縁がなければ殺すことはできないということをお話しました。

また「本願^{ぼこ}誇り」と言って、わざと悪いことを行う人の問題が出てきました。

阿弥陀仏の本願すなわちお念仏するすべての人を救うというお誓いに甘えて、「悪人正機^{あくにんしょうき}」すなわち「善人でも救われるのだから悪人が救われるのは間違いない」ということに甘えてつけあがったのです。

当時、そうした「本願誇り」の人のことを批判する人がいたのですが、こうした人は本願を疑うものであるとして、唯円房は批判されました。

そして世間的な道德の善悪と宗教的な善悪とは異なり、世間的な善悪がそのまま宗教的な善悪として肯定されるわけではありません。

世間的道德の善悪が一度否定され、世間的価値から超越した宗教的な善悪の価値観によって、この世がふたたび肯定されて、私たちのような凡夫も救われるのです。

道德と宗教の善悪の区別を認識することは、宗教的な救いを理解する上で大切だと思います。

自分の力では迷いを離れることができない人が「悪人」であって、世間一般でいう、法律に反したり警察のお世話になるような「悪い人」のことではありません。

自己中心的な考えに執着して抜け出せない、煩惱まみれの私こそが「悪人」です。

自分こそが「悪人」であり、「煩惱具足」であり、「宿業的存在」であると認識できてはじめて、阿弥陀仏の本願が信じられるのです。

◎今回のテーマ：本願誇りは邪見だが、悪は往生の妨げではない

今回は『歎異抄』第十三条の続きの二回目で、本願に甘えてわざと悪いことを行う「本願誇り」の

人を^{いまし}戒める言葉が出てまいります。

その邪見を見極めて、「薬があるからといって毒を好むな」と親鸞聖人のお手紙で説かれますが、これは阿弥陀仏の本願という救いの薬があるからといって、煩惱という毒を好むな、ということです。

しかしこれは、悪が往生の^{さまた}妨げになるということではありません。

悪を犯さずにはいられない私たちを^{あわ}憐れんで、そんな私たちを救うために、阿弥陀仏は本願を起こされたのです。

そして異義の人は、本願を信ずる人にも戒律を強要しようとしますが、それは本願の道から外れたものであり、戒律を守ることは、往生の絶対条件ではないのです。

◎くすりあればとて毒をこのむべからず

「そのかみ^{じゃけん}邪見におちたるひとあて、悪をつくりたるものをたすけんといふ願にてましませばとて、わざとこのみて悪をつくりて、往生の業とすべきよしをいひて、やうやうにあしざまなることのきこゑさふらひしとき、御消息に、くすりあればとて毒をこのむべからずとあそばされてさふらふは、かの^{じゃしゅう}邪執をやめんがためなり。」

「そのかみ」というのは、かつて、その昔、その当時、以前、という意味です。

「邪見」とは、まちがった、よこしまな考えのことです。阿弥陀仏の本願に甘えて、どんな振る舞いをしてもいい、わざと悪を犯しても構わないという「本願誇り」の考えのことです。

「あて」は、ありて、あつて、ということです。

「往生の業」とは、極楽浄土に生まれるための行いや業因のことです。

「やうやうに」というのは、さまざまに、とかいろいろと、という意味です。

「きこゑ」は、噂とか評判のことです。

「御消息」とは、親鸞聖人のお手紙のことで、『^{まつとうしょう}末灯鈔』第二十通と『^{ごしょうそくしゅう}御消息集』^{こうほん}広本第一通を指します。

「くすりあればとて毒をこのむべからず」では、「くすり」を阿弥陀仏の本願に、「毒」を^{とんよく}貪欲、^{しんに}瞋恚、^{ぐち}愚痴の^{さんどく}三毒の^{ぼんのう}煩惱にたとえています。貪欲とはむさぼり、瞋恚は怒り、愚痴は無知や愚かさで、人間の三大煩惱のことです。

「あそばされて」は、お書きになる、という意味です。

「邪執」は、誤った、よこしまな考えにとらわれることです。

(現代語訳)

「かつて親鸞聖人がご存命の頃、誤った考えにとらわれた人がいて、阿弥陀仏の誓いは悪を犯した者をお救いくださるという本願であるからと、わざと好んで悪事を働き、それを往生のための行ないとしなくてはならないなどと言い、いろいろと悪い噂が聞こえてきました。そこで聖人がお手紙に、「いくら薬があるからといって、好きこのんで毒を飲むものではありません」とお書きになられたのは、そのような誤った考えにとらわれているのをやめさせるためなのです。」

前回、唯円房は、「本願誇り」を批判する異義の人のことを批判しましたが、だからと言って、わざと悪い行いをするのも間違いだと言います。

これは当時横行していた、わざわざ悪事を働いている者たちを諷^{いさ}めるためなのですが、「悪人だから往生できない」という意味では決してないのです。

◎「本願誇り」＝わざと悪事を行うという誤った考え

「本願誇り」というのは、悪はいくら多くても構わないものであり、過去に悪を犯していても、現在悪をなしていても、未来にどんな悪を作ろうと、それに関係なく助けてくれるのが他力本願であるというものです。

悪人救済の本願であるから、自分の思い通り、感情のおもむくままに、悪事をやってもよいのだというのです。

これを「造^{ぞうあくむげ}悪無碍」とも言い、本願を勝手に解釈した、誤った邪見の考えです。

「本願誇り」「造^{ぞうあくむげ}悪無碍」が認められないのは、「わざと」「故意に」行うということによるのであり、阿弥陀如来の本願のお誓いは「善人よりも悪人こそ」とあることを曲解して、「悪は思う様に振舞うべし」と説いた人々に対する厳しい戒めです。

◎悪をやめないと救われないのではない

薬があるからといって、好んで毒を飲むのは間違いだと親鸞聖人が注意されたのは、邪執をとどめさせるためであり、決して悪をやめなさいと命令されたのでもなければ、悪をやめないと救われないと言われたのでもありません。

このような邪執に陥っているのを改めさせようとして、こう言われたのです。

◎自力の行いでは本願を理解していない

もちろん、「^{はいあくしゅぜん}廃悪修善」すなわち悪をやめて善を行うというのが正しい道理ですから、悪を働く方が良いと考えて何とも思わないというのは、正しいことではありません。

そして「^{けんぜんしょうじん}賢善精進」すなわち賢く善いふるまいを努め励むという正しい行いも、称賛されてもいいはずです。

しかし親鸞聖人は、「賢善精進」のあり方は「自力」であり、本願を理解していないとして批判されています。

この「賢善精進」については、次回もまた出てまいります。

◎悪をやめられない私たちを救ってくださるのが大慈悲の本願

悪に対してどうにもならない私を助けようというのが本願のお慈悲ですから、悪に甘えて、悪を誇るということでは決してありません。

わざと悪をやってもいいということではなく、悪をしてしまうのは、いかんとも仕方がないのです。悪をやめられない私たちを救ってくださるという本願の尊さやありがたさを誇るのであって、この本願があるからこそ、私たちは心の安定と喜びを得られるのです。

◎親鸞聖人のお手紙『^{まっとうしょう}末灯鈔』『^{ごしょうそくしゅう}御消息集』より

この「御消息」すなわちお手紙は現存していて、親鸞聖人が書かれたお手紙をまとめた『^{まっとうしょう}末灯鈔』第二十通と『^{ごしょうそくしゅう}御消息集』^{こうほん}広本の第一通に出てきますが、このどちらも内容は同じです。

親鸞聖人のお手紙をまとめたものは、^{せんじゃ}撰者の編さんの仕方によっていくつか存在し、『末灯鈔』、『御消息集』^{りやくほん}広本、『御消息集』^{ぜんしょうぼん}略本、『御消息集』^{じょうこうじぼん}善性本、『御消息』^{けちみやくもんじゅう}浄光寺本、『血脈文集』などがあります。

そしてこのお手紙の原文は少し違っており、親鸞聖人ご自身のお言葉は、以下の通りです。

「^{さふらふ}ゑひもさめぬさきになをさけをすすめ、毒もきえやらぬにいよいよ毒をすすめんがごとし。くすりあり、毒をこのめとさふらふらんことは、あるべくもさふらわずとぞおぼえ候。」

(現代語訳)

〈酔いもさめないうちにさらに酒を勧め、毒も消えきっていないのに、ますます毒を勧めるようなものです。薬があるからといって、好きこのんで毒を飲めというようなことは、あってはならないと思います。〉

◎私たちは煩悩の酒に酔って生きている

親鸞聖人は、「我々は煩悩の酒に酔って生きている」と言われます。

だから、物事をきちんと判断できないですし、善悪だって判断できないのです。

悪行を好むのは、煩悩の酒に酔っぱらっているのに、さらに酒を勧めるようなものだと書いておられるのです。

薬があるからといって毒を飲むのもおかしな話で、癌の特効薬があるからといって、わざわざ癌になる人はいません。

しかし以前私の知人に、痛風を患っているというのに、痛風の薬を飲んでいるから大丈夫だと言って、ビールをガンガン飲んでた人がいました。アルコールの中でもビールは痛風に悪いプリン体が特に多いそうですが、やはりこの方は長生きできなかったようです。

無明の酔いがまださめていないのに重ねて酒を勧めたり、煩悩の毒も消えていないのに毒を勧めるようなことは、あってはならないことです。

◎悪は往生の妨げではない

「またく悪は往生のさはりたるべしとにはあらず。」

「またく」というのは、全然、決して、まったく、という意味です。

(現代語訳)

〈しかし決して悪を犯すことが往生のさまたげになるというわけではありません。〉

悪いことをすると往生できないというのではなく、悪を行うことが往生の役に立つという考えが、間違っているのです。

悪は往生の妨げにならないということと、わざと悪を行うというのは別の問題です。

◎戒律を守ることも往生の条件ではない

じかい じりつ
「持戒持律にてのみ本願を信ずべくば、われらいかでか生死をはなるべきやと。」

「持戒持律」とは、戒律を守って破らないことです。戒律とは、行為や言葉、思想において邪悪なことを犯さないようにする規則で、仏道修行者の規範です。

「いかでか～べきや」というのは、どうして～だろうか、という意味です。

（現代語訳）

〈「戒律を守り悪い行いをしない人だけが本願を信じ救われるのなら、私たちはどうして迷いの世界を離れることができるでしょうか」と、聖人は仰せになっています。〉

厳しい戒律を守らないと救われないということでは、私たちは救われません。

戒律を守ることではしか本願を信じられないなら、私たちのような凡人は、とてもこの迷いの世界を離れることはできないのであり、私たち凡夫が助かる時は永遠に來ないことでしょう。

◎あさましい罪惡深重の私でも、本願に出会うことで救われる

「かかるあさましき身も、本願にあひたてまつりてこそ、げにほこられさふらへ。」

「あさましき」は、きわめて情けない、という意味です。

「げにほこられさふらへ」というのは、本当に甘えられるのである、ということです。

（現代語訳）

〈このような情けない身でも、阿弥陀仏の本願に出会わせていただいてこそ、本当に本願を誇り甘えることができるのです。〉

「かかるあさましき身」というのは、自分は善ができない人であり、悪がやめられないという「悪人」の自覚が明らかな人のことです。

この人は、善を行おうとしても、自分にはなかなか簡単にできないということがわかっているの

す。

それがわかればわかるほど、「罪惡深重」^{ざいあくじんじゅう}すなわち罪や惡が深くて重い自分であるということが、明らかに知らされてきます。

そして自分の善惡に深くこだわらずに、本願を信じることによって、私たちは救われるのです。

◎業因がそなわらない限り、惡は犯せない

「さればとて身にそなへざらん惡業^{あくごう}は、よもつくれさふらはじものを。」

「身にそなへざらん惡業」というのは、自分の身には条件がそろっていない惡業を行うことです。「よも」は、よもや、まさか、という意味です。

（現代語訳）

〈だからといって、わが身に惡を犯す業因がそなわっていないときは、まさか自分で惡を作ることはいけません。〉

自分の身にそなわっていない惡業は、業因がなければ、悪いことをしようと思ってもできないのです。

前回出てまいりました、「人を千人殺せと言われても業縁がなければ殺せない」という話と同様に、自分の身に業因がそなわっていない惡業は、やろうと思ってもできるものではありません。

◎自力を離れて本願他力を信じることで救われる

罪惡が深い者が救われるのは、阿弥陀仏の大慈大悲の現れです。

阿弥陀様は、私たちが迷いや苦しみから解放されて、真の幸福に導かれることを願って、大悲の本願を起されたのです。

この本願をありがたく信受し、自身の罪惡を顧^{かえり}みて懺悔^{さんげ}し、「廻心^{えしん}」すなわちそれまでの悪い心をひるがえし、自力の心を捨てて本願他力を信じることによって、私たちは救われるのです。

往生^{しょういん}の正因は信心であり、罪惡は往生の正因ではないのです。

◎「賢善精進^{けんぜんしょうじん}」「廢惡修善^{はいあくしゅぜん}」＝自力の行であり、これらを勧めたのではない

「本願誇り」「造悪無碍」は、阿弥陀仏の本願を誤解した、無信仰な邪執です。

聖人はこうした邪執に陥った人をいまし誡めて、「くすりあればとて毒をこのむべからず」とさと諭されたのです。

しかし決して「専修賢善」すなわちもっぱら賢く善いことを修することや、「はいあくしゅぜん廃悪修善」すなわち悪をやめて善を修めるといふ、「自力」の行いを勧められたものではありません。

◎倫理・道徳の「自力」では解決できない苦悩のために、他力の救いがある

仏教では「はいあくしゅぜん廃悪修善」が基本ですが、倫理・道徳では解決できない苦悩が大きな問題となるのが、宗教の救済なのです。

本願という薬があっても悪や煩惱という毒を好んではないと親鸞聖人がおっしゃったのは、悪いことをつつし慎み、戒律を守って善を行い、悪をやめようと考えることではありません。

これらは「自力」すなわち自分で修めた善行によって助かることですから、本願を信じ他力を頼む必要がないことになります。

◎「じりききぜん自力作善」では助からない私たち

「じりききぜん自力作善」すなわち自分の力で善を行うことでは助からない私たちだからこそ、あれこれはからわずに阿弥陀仏の他力の慈悲におまかせすることによって、救われるのです。

今日は、ここまでにしたいと思います。

次回は11月23日の報恩講の時に、第十三条の続きの三回目をお話したいと思います。

次回も善悪や本願誇りの問題が出てまいります。

ご清聴ありがとうございました。